マン兄弟の確執 ―1903～05年―
（その 5）

三　浦　淳

Ⅷ. トーマス・マンの結婚（承前）

（2）結婚までのトーマス・マンと作品構想

a）パウル・エーレンベルクと『恋人たち Die Geliebten』構想

トーマス・マンが処女長篇『ブッデンブローク家の人々』を書くことでおのれを発見したという点については，私は以前別の機会に触れたことがある。(14) 最初の構想では虚弱な末裔ハンノを描く短篇になるはずの作品を，数世代に渡る市民の生活を描く長篇にしてしまうことで，彼は単なる芸術家小説ではなく，市民を描く叙事的な小説を書く結果になったのだった。しかしその時，私は主に，作家としての資質をトーマスが見いだしたという点から論じたのであった。だが見方を変えれば，芸術に心惹かれながらも成熟せずに死んでしまう少年だけではなく，幾世代にもわたる市民的な商人一族の暮らしを描くことで，彼は実際に自分がどう生きていくかという問題に関わり始めていたのである。のちに兄ハインリヒが自分をフローベールになぞらえて綴ったエッセイ『ギュスターヴ・フローベールとジョルジュ・サンド』で述べたように，「本を書き上げたということは端緒に過ぎず，本の意味の方はまったく意識に上らないという場合もある」。(15) トーマスは自分でも知らないうちに，兄を模倣して心酔したボヘミアン的な芸術家気質（ハインリヒや若年のトーマスを魅惑したイタリアはその象徴である）から離れ始めていたのだった。

処女長篇に続けて書かれた短篇『トーニオ・クレーガー』が芸術家＝ボヘミアンにたたきつけた挑戦状だということはこの論考のⅣで触れた通りであるが，以上のような流れからするとこの短篇が生まれるのは必然的であったというこ

とになる。つまりトーマスは『ブッデンブローク家の人々』から一歩踏み出して，「本の意味」をかなり「意識に上ら」せながら『トーニオ・クレーガー』を書いたのだ。

しかし，ボヘミアン＝芸術家に背を向けてハンスやインゲのような平凡な市民を愛するという決意は，自分の意識の持ち方への指針にとどまるのであって，主人公が具体的に自分の身をどう処するかという問題に答えるものではない。小説という虚構の中の人物はそれでもよかろうが，作家トーマス・マンは現実の社会の中に生きている以上，ではお前は具体的にどう生きるのかという問いを回避することはできないのである。

無論，『トーニオ・クレーガー』を書いた時の彼がこの問題をそれほど理路整然と考えていたとは思われない。実際にはそれはトーニオのリザヴェータ相手の議論がそうであるように，話したいことが山ほどあるのにその意図は自分でもつかめないような曖昧模糊としたものであっただろう。だが話を聞いたリザヴェータが最後に「あなたを悩ませている問題の答，それは，あなたが単なる普通の市民に過ぎないということなのですよ」と言い，「この判決を少し情状酌量してあげましょう」「あなたは道に迷える市民ですわ」[16]と言う時，解答はすでに与えられていたのである。

こうしたトーマスの歩みを示すのは発表された小説作品ばかりではない。友人パウル・エーレンベルクとの関係に注目すると，別の側面からこの時期の彼の姿が見えてくる。

トーマスがパウル及びその弟カルルのエーレンベルク兄弟と知り合ったのは1899年のクリスマス直前であったが，内気で気むずかしいトーマスには珍しくすぐに親称 du で呼び合う仲になっている。[17]若き日の彼らとの交友をトーマスは約30年後の『Lebensabriß 略伝』（1930年）でも，[18]また晩年，1949年にパウルが死去した時には弟カルルに宛てた手紙の中でも，なつかしく思い起こしている。[19]トーマスはそのノート７の97ページに（多分『トーニオ・クレーガー』執筆中であった）こう記した。

> 《P〔パウル〕は僕の最初の，そして唯一の人間の友達だ。今まで僕には怪物や妖怪，悪魔，そして認識の沈黙にひたる幽霊，つまり文学仲間にしか友人がいなかった。》[20]

文学仲間を怪物扱いし，「人間」であるパウルと比較するこの記述は，『トー

ニオ・クレーガー』で主人公が「芸術家」とハンス＝インゲを比較する箇所を彷彿とさせるし，実際この小説にそのまま利用されている。[21]

また1901年２月13日に兄ハインリヒに宛てた手紙でトーマスが，

《思いもかけぬ純粋で得も言われぬ幸せ（…）が交錯したのです。いわく言いがたい体験でした。（…）でも文学とはまるで無縁の，非常に素朴で生き生きとしたこの体験によって，気づいたことがあったのです。僕にも単に「イロニー」だけではなく，誠実で暖かく善良な部分があるのだということ，呪わしい文学はまだ僕の全てを荒廃させねじ曲げ食いつくしている訳ではないのだということです。》[22]

と語っているのは，こうした友情体験に他ならなかった。また同年３月７日付けの兄宛て書簡でもこう述べている。

《恋愛をしたのではありません。少なくとも普通の意味ではそうではありません。むしろあれは友情で，――驚くべきことに――理解と反応と報いに満ちた友情だったのです。飾らずに言いますが，ある種の時間には，特に抑鬱と孤独に打ちひしがれている時には，耐え通さねばならない性質を持った友情でした。グラウトフにいたってはこう主張しています。お前は要するに高校生みたいに恋をしてるんだと。でも彼は思った通りを言ったのです。私のような考え方をする神経質な人間は，事を信じ難いほど複雑化して考えます。あのことには百もの側面がありました。単純極まりないところから，精神的な冒険に満ち満ちたところまで。しかし最も大事なのは，この人生にもう期待してはいなかった出会いに対する，深い喜びのこもった驚きの念でした。これだけ言えば十分です。ひょっとすると口頭でさらにお話するかも知れません。》[23]

なかなか興味深い手紙ではある。友人グラウトフがお前は高校生みたいに恋をしているのだと評したのは，ある意味では的を射ていたのではないか。

ここで私は，単にトーマスの同性愛的傾向を指してそう言うのではない。彼の日記が公開されてからその種の議論はかまびすしいが，若年期にあっては同性の親友を求める気持ちと異性の恋人を求める気持ちには一種共通のエロティックな感情が働いていると考えるのが自然なのであって，少なくとも兄への上記の告白は率直に受け取っておいて構わないと思う。[24]

さて，1902年１月28日，トーマスはパウル・エーレンベルクに手紙を書いた。

ちょうど『トーニオ・クレーガー』を執筆していた時期であることに注意したい。以前述べたように，パウルの形姿はハンス・ハンゼンの人物像に影響を及ぼしている。Mendelssohn によれば，この頃『ブッデンブローク家の人々』が――まだ売れ行きは振るわなかったとはいえ――一部の批評家に認められ，それが逆にトーマスをして生と芸術の懸隔を意識させることになった。[25]謝肉祭の時期，ミュンヘン・シュヴァービングの舞踏に熱中して自分の前に姿を現さないパウルに，トーマスは『ブッデンブローク家の人々』の書評を同封した上でこう訴えかけたのである。

《親愛なるパウル，舞踏の合間にもちょっとした娯楽を手にしてもらいたくて，こんなお笑い草〔書評〕を同封するよ。それとも耳をふさぎたくなるばかりだろうか。何しろ騒々しい書き方をしているからね。僕はといえば，こういう好意的な雑文を読みながら笑みを浮かべていたのだけれど，だんだん憂鬱になるばかりなんだ。この（なかなかよく書けているけど）記事の筆者のような人たちは，遠い場所から僕に好意を抱いてくれる。多数の人たちが僕という人間を知らないのに，否，知らないからこそ僕の才能を熱烈に買ってくれるって訳だ。僕はこういうトロフィーを周囲に飾っていかにも満足そうな顔を装っているのだけれど，それというのも，僕の周りには人間的・個人的な親愛の情や信頼や熱情や友愛といったものがまるっきり存在していないので，その代償にしようと思っているからさ。実際こういったものがないってことを僕は痛感しているし，そのせいで僕の創造的な力も萎えてきているくらいなんだ。

本当のところ，僕は才能をこんな風に誉められるのには恐ろしくうんざりしている。だって存在していないものの代償にはどうしたってならないのだからね。いったい人間はどこにいるのだ？　人間としての僕，愛想は余り良くなく，むら気で，自虐的で，不信心で，猜疑的なくせに感じやすく，異常に他人の共感に飢えているこの僕を，全面的に受け入れてくれる人間は？　絶対迷わずにだ。見せかけの冷たさや拒絶にあっても尻込みしたりそっぽを向いたりせずにだ。（…）こういう人間はどこにいるのだ？！？――誰も答えてはくれない。（…）

僕はここ数日ひどい目にあってとことん傷ついてしまい，舞踏会や仮装行列に出かける気分にはなれないでいる。ひとりぼっちで，誰にも理解さ

れず，暗鬱で，重苦しい気分なんだ。一言発してしまえば気が軽くなりそうだなとは思う。「僕のところへ来てくれ」と言ってしまえれば。君が他の人たちと違って，僕の才能には尊敬の念を抱きながら人間としての僕には嫌悪感を持ったりしないと，仮に僕が思ってよければだが……。さようなら。T.M.》（下線は原文で斜字体）[26]

痛々しい手紙ではあるまいか。約10カ月後に完成する『トーニオ・クレーガー』にも表現されている人恋しさが，生の形でむき出しになっている。そしてこの訴えにパウルは答えたのだった。トーマスが残したノート７の62ページには《P〔パウル〕が１月30日午後に来る》との記述がある。[27]手紙が１月28日付けなのだから，パウルはすぐにトーマスの心中を察して反応を示したと言えるだろう。

この手紙を書いた時，トーマスは26歳だった。パウルは１歳年下。何の予備知識もなく読めば，20歳前の少年が書いたと思われても不思議のない手紙ではないか。それだけに一層，この時期トーマスが陥っていた心理的危機の深さがうかがわれる。

しかしそれで二人の仲が順風満帆になったという訳ではなかった。同年５月，二人の間に危機が訪れたらしい。トーマスは５月２日付けでパウル宛てに手紙を書いた。

《親愛なるパウル。君が遠ざかっていて手紙もくれないのはよくよく考えてのことだと思うけれど，それはよくないことだし，第一そんな態度をとっていれば，君が感情を損ねてもそのことで僕を非難したり忠告をくれたりする権利まで放棄してしまうことになるだろう。

君は僕に写真を持ってきてくれるはずだったね。君が最近非常に用心深い言い方をしたところによれば，君の名前をその上に書いてくれるということだった。なぜ持ってこないのだい？　僕が月曜に写真を欲しいと言った時の態度が余り熱心じゃなかったからか？　僕がたった一晩君に投げやりな印象を与えたからといって，君が僕にとってこの上なく大事な存在だということをたった一晩態度に十分示せなかったからといって，――一週間ものあいだ（君がミュンヘンを発つ直前の一週間だ！）故意に僕を避ける理由になるのかい？》[28]

Mendelssohn がこの手紙について，《知り合って二年半にもなるのにこの

有様なのだ！》と評しているのは的確だろう。[29]言い換えればそれほどにトーマス・マンのパウル・エーレンベルクに対する態度は世慣れず，俗っぽい言い方をすれば惚れた弱み丸出しだったのである。

こうした中でトーマスは，以上のような精神状態と並行するように，一つの作品を構想する。

彼が1900年代の初めに『恋人たち Die Geliebten』という作品の構想を立てていたこと，それがのちに『マーヤ Maja』と名を改めたものの，結局作品としてはまとまった形を取らないままに終わり，一部分が晩年の大作『ファウストゥス博士』に利用されたことは，マン研究者には広く知られている。したがって以下ではこの構想そのものに詳細に立ち入ることはせず（Hans Wyslingに grundlegend な研究がある[30]），パウルとの友情体験とこの構想との関係という側面に限って触れておくことにしたい。

ごく簡単に経緯をたどってみると，最初にこの作品の構想が書きとめられたのはノート4[31]で，1901年3月に起こったドレスデンでの事件に触発されたものである。人妻が有能な音楽家たる若い男性を市電の中で射殺するというセンセーショナルな事件であった。翌1902年3月，マンは女友達 Hilde Distel にこの事件の詳細を教えてくれないかと乞う書簡を出している。[32]ノートの書き込み自体は遅くとも1901年の秋にはなされている。

ここで注意したいのは，この事件が起こり作品が構想された1901年から1902年にかけての時期が，パウルとの友情体験の時期と一致するという事実である。そして人妻が恋着の対象たる男性を市電内で射殺するという事件は，のちに『ファウストゥス博士』第42章でイーネス・インスティトーリスがルードルフ・シュヴェーァトフェーガーを射殺する事件として作品化された訳だが，いわば三面記事的とも思われるこの事件にトーマスが興味を示したということの重みは，パウルとの関係を考えてみると小さくない。さらに，Hilde Distel に事件の詳細について問い合わせた1902年3月が，事件の直後ではなく，それから丸一年たった頃であり，パウルとの仲が（恐らくはトーマスの過敏さ故に）怪しくなりかけた時期と重なっている点を見逃さないようにしたい。

簡単に言ってしまえば，この事件はトーマスにとって人ごとではなかったのだ。感情の行き違いや裏切りが殺人にまで行き着くほどの激しい恋着の情。『トーニオ・クレーガー』の，ハンスやインゲに対する主人公の淡い恋情だけ

を見ていてはつかみきれないどろどろとした部分がこの時期のトーマスにはあったということだ。

さて，パウル・エーレンベルクについての書き込みはノート6にもあり，[33]また『恋人たち』に関するメモは上述の通りノート4の43ページにも見られるが，本格的な書き込みはノート7においてである。ノート7では11ページに最初の書き込みがあり，[34]これは Wysling の推定では1901年初めになされたと見られ，[35]それから1902年冬にかけて最も集中的にノートがとられている。内容は，前述の人妻による愛人射殺事件の敷衍であり，人妻は Adelaide と名づけられ，その夫は Albrecht（または Eugen）という名でルネッサンス祭祀に熱狂するデカダントであり，射殺される恋人のヴァイオリニストは Rudolf Müller となっている。

すなわち，Adelaide とはトーマスであり，Albrecht とは兄ハインリヒであり，ヴァイオリニスト Rudolf Müller はパウルだということになる。実際，Albrecht の名はのちに『大公殿下』で俗世間の仕事には耐えられないと言って弟に相続権を譲る長男（これもトーマスから見た兄の姿を写している）の名に流用されているし，Rudolf Müller はそのファーストネームと職業がそっくり『ファウストゥス博士』の登場人物に受け継がれている。ちなみにパウル・エーレンベルクは画家であったが，音楽にも才能があり，最初はヴァイオリンと絵筆のどちらを選ぶかで迷ったこともあった（弟カルルは音楽家であった）し，[36]ヴァイオリンを上手に弾いたから，[37]パウルの姿を写した Rudolf がヴァイオリニストであるのにもそれ相応の含みがあるのだ。

そして実際，ノートでの書き込みでは Rudolf はほぼパウルその人であると言って差し支えない。例えば，1902年1月にトーマスがパウルに手紙を送りパウルがすぐにそれに応えたことは上述の通りだが，この出来事はノート7の68・69ページですぐに小説のシーンに書き直されている。Mendelssohn の指摘するとおり，ノートではP〔パウル〕と「彼」という記述が交錯し，現実とフィクションの境目が曖昧になる。[38]生 Leben が芸術 Kunst のために営まれているようだ。トーマスは『トーニオ・クレーガー』で作家の仕事をこう描写した。

《「感情が涙に曇っていても，そのヴェールを通して明察し，認識し，注意深く観察する。そして手と手が絡み合い，唇が触れ合い，目が激情の余

りくらんでしまうような瞬間になっても，なお観察したものを微笑みながら脇に取りのけておかなくてはならない――これは恥ずべきことですよ，リザヴェータ，下劣でけしからんことじゃないですか」》(39)

「けしからんことじゃないですか」と言ってもなお「観察」をしてしまうのが作家の作家たる所以だということになろうか。

トーマス自身が同化する作中人物が Adelaide という女性であるのも興味深い。『エジプトのヨセフ』のムトーエムーエネトや『欺かれた女』のロザーリエや『ヴァイマルのロッテ』のシャルロッテのように，トーマス・マンの作品にあってはしばしば，応えてくれない相手を想って身を焦がすのは女性になっている。これは彼の作家としての資質と彼自身の性向を考える時なかなか示唆的な点ではあるが，ここでは深入りはしない。

さて，以上のようにパウル・エーレンベルク体験は，『恋人たち』構想という形でノートの中では文字化されたが，結局作品としては完成せずに終わった。原因はいくつか考えられる。テーマが『トーニオ・クレーガー』や同時期の『飢えた人々 Die Hungernden』などの別の作品に吸収されていったこと，構想自体がやがて『マーヤ』というドレスデンの市民世界を扱う社会小説にふくれあがっていきトーマスの手に負えなくなってしまったことなど，彼の作家としての活動そのものに根ざす理由がまず挙げられよう。

しかしそれ以外にトーマスの心理的要因があるとする説を Mendelssohn が唱えている。これはきわめて面白い説で，またトーマスの結婚問題にもつながりがあるので紹介しておこう。

トーマスは1903年８月12日の日付で友人グラウトフに宛てた書簡の下書きを，ノート７の119ページ以下に残している。（実際に出したかどうかは分かっていない。）

《お願いだから，昨晩君に話したことをケルにもらさないで欲しいのだ。当たり障りのない形でもいけない。自分自身にすら無様に見えるのに，彼の前に滑稽な姿をさらしたくないんだ。最近日ごと夜ごと奇蹟や荒唐無稽なおとぎ話を想像してばかりいる …… なんて僕は莫迦なんだろう！（…）僕のフロックコートの型だけでも興味を呼び起こしてくれたら？　いや，そんなことはあり得ない。》(40)

ケルとは批評家の名前であるが，これについて Mendelssohn は慎重な言

い回しながら，社交の場でカチア・プリングスハイムを見初めたことを語ったものである可能性もあるとしている。[41]トーマスがカチアと正式に知り合ったのは1904年の２月と推定されており，その直前に市電内でカチアをトーマスが見初めたというのが定説になっているが，晩年になってカチア夫人がインタヴューに応じて残したメモワールによると，それ以前からトーマスはカチアを知っていて注目していたというから，[42]これは大いにありそうなことだろう。ただ，Wysling になるとこの書簡草稿をカチアのことだと断定的に書いているが，これは行き過ぎではなかろうか。[43]ちなみにカチア夫人がメモワールの中で，批評家ケルも自分に気があった一人だと述べているのは面白い。[44]

そして Mendelssohn はさらに注目すべき推測をしている。この頃からノートでのパウルと『恋人たち』についての書き込みが減っているのは，カチアを見初めたからかも知れないというのである。私生活と創作とのこうした連関は十分あり得ることだと私も思う。実際，この頃からパウルとの文通は１年余りにわたって頻度が激減している。[45]トーマスがパウルに手紙を送り，《結婚式が済めば僕らの創造的な友情が再び勢いよく回転し始めるだろう》と表明したのは，翌1904年の10月28日，つまりカチアとの婚約が成立した直後であった。[46]

理由はどうあれ，1903年の半ば頃を境にパウル・エーレンベルク及び『恋人たち』構想へのトーマスの関心は一段落した。そして代わりにカチア・プリングスハイムが登場する。

b）カチア・プリングスハイムと『大公殿下 Königliche Hoheit』

トーマス・マンがのちに妻となるカチアと知り合うにあたっては有名なエピソードがある。当時大学生だったカチアが市電から下りようとした時に，切符を持たない不正乗車と車掌に見なされて一悶着あり，この時たまたま同じ市電に乗っていたトーマスが彼女を見初め近づきになろうとしたというのである。[47]彼は知り合いのベルンシュタイン夫人を介して正式にプリングスハイム家に紹介してもらう。Mendelssohn は，市電の中でのトーマスとカチアの出会いを1904年２月初め，正式に知り合ったのは２月10日か11日と推測している。[48]トーマスは同年２月27日付けの兄宛て書簡でカチアに正式に紹介されたと報告しているので，この推測は正しかろう。[49]もっとも，トーマスの方がこれ以前から

カチアを知っていたらしいことは前述の通りである。

ここではトーマスがすぐにカチアとの結婚を考え，求婚し，やがて彼女の心を得てめでたしめでたしとなるまでの詳細な過程は省略する。三面記事的な興味は私にもなくはないが，所詮は月並みな話だからである。

肝腎なのは，1903年の半ば過ぎからパウル・エーレンベルクと『恋人たち』構想への彼の関心が後退し始めたという事実であり，それが彼がカチアに関心を向け始めた時期と一致する，もしくはその間に半年程度の時間しかないというところである。カチアは，パウルへの関心が後退する原因だったのか，或いは逆にその結果だったのか――それはいささか乱暴な言い方をすればどうでもいいことだ。つまり，どちらでも同じだからである。要はこの時期，トーマス・マンの心理状態はカチアと出会って結婚を考えるのに熟していたということなのである。

ただ，少年時代からあった彼の同性への興味と，結婚相手としてカチア・プリングスハイムを選んだこととの接点は多少気にとめておく必要はあるかも知れない。

まずカチアの容姿である。人が異性を選ぶ際の重要な決め手の一つが容姿であることは言うまでもない。残されている写真（下を参照せよ）からすると，結婚直前頃のカチアは美人ではあるが，なよやかさや色気が前面に出るタイプではない。むしろその容貌にはりんとした美少年風のところがあり，若い頃か

1905年のカチア

カチアと母ヘートヴィヒ

ら美貌をうたわれ一時期女優をしていた母ヘートヴィヒのいかにも女っぽい容姿とはかなり違っていたと考えられる。父方の祖母から《お前は美貌という点でお母さんに及びもつかない》と言われたと後年カチア夫人は述懐している。(50) これは謙遜をこめての引用でもあろうが，美貌の基準をカチアの母においた人の評言という点で興味深い。

しかし男が女のどこに魅力を感じるかは様々である。いかにも女っぽい部分に惹かれることもあれば，むしろ硬質の中性的な部分に魅力を感じることもある。一人の女性の中にこれらの要素が混在していて，その混在の仕方によって女に対する男の，いわゆる「好み」が決まるのだ。恐らくトーマス・マンにとって，カチア・プリングスハイムはそのような意味で，好みに合致する娘だったのだろう。

しかし生涯の伴侶を選ぶ際には，容姿だけが決定要素になる訳ではない。彼女が大学に籍をおいた女性であったことを思い起こそう。二十世紀初頭のドイツでは大学に進学する女性は稀であった。父が大学教授という恵まれた環境もあったにせよ，それなりの資質がなければ進学はおぼつかなかっただろう。父の影響もあってカチアは大学では特に自然科学を学んだ。次男ゴーロの回想によれば，頭脳の明晰さや論理的思考力という点でトーマス・マンはカチア夫人の敵ではなかったという。しかしその一方でゴーロは，形式論理では捉えられない大事な何かを感じる能力が母を含むプリングスハイム家の人々には欠けていたとも述べている。(51)

こういったカチアの特質は，トーマスがなぜ彼女を選んだのかという問題を解く上で貴重な鍵となる。結婚相手を選ぶのは一面では生涯の友情を結ぶ相手を探すのに似る。いかに美貌の主であれ知性や精神性の面で自分に遠く及ばない人間を生涯の伴侶とするのは好ましくない。しかし，人間の魅力は欠けている部分にも由来する。万事に渡って自分と対等，或いは優れている女性であったなら，友人としてはともかく配偶者に選ぶにはためらうだろう。例えば余りに感受性が敏感で文学に惑溺するような女性であれば，彼は配偶者としては敬遠したのではなかろうか。ゴーロの指摘するような，カチアのきわめて知性的でありながら同時に感性面に欠落を持つという側面こそが，素朴な印象を作り，容姿と共に若いカチアのある種硬質な色気を形成していて，それがトーマス・マンには魅力と映ったのではなかろうか。なお最近大部のトーマス・マン伝を

出版した Donald A. Prater は，カチアが五人きょうだい中唯一の女の子として育った点に言及し，彼女にはどこか男の子のようなところがあったのかも知れないと述べている。[52]

カチアに出会うこと三年前，彼はフィレンツェ滞在中にメアリ・スミスという英国女性と知り合い結婚まで考えたことがあった。[53]その時も兄ハインリヒに《私はいつも頭のいい女性が好きになってしまうのです》と書き送っているが，[54]この彼の発言はそうした背景で考えれば分かりやすい。

アルミン・マルテンスやパウル・エーレンベルクなど彼が熱烈に友情を求めた少年もしくは青年はある種心情的なナイーヴさを持つタイプだった。ナイーヴさとは過度の知的分析力を押さえることである。これだけからするとトーマス・マンは男性と女性に逆のタイプを求めたようにも見える。Wysling は，トーマスが1904年８月にカチアに宛てた手紙で《僕はこれまで人を愛する時，同時に軽蔑していました》と述べている箇所を引用しつつ，カチアとの愛はそれ故に美と精神，エロスと倫理を兼ね備える者への愛だったと結論づけている。[55]しかしこれはいささか綺麗事すぎはしないだろうか。ぜひこの女を妻にと思いこんだ時の男はだいたい頭に血が上っているものだし，しかもまだ婚約までこぎ着けていない相手に出したラブレターとなれば，信憑性は多少割り引いて認めておいた方が無難である。

そもそも男性から女性を見る場合，女性の高い知性とはナイーヴさと正反対のものだろうか。この点で女性は男性とはやや事情を異にするのではなかろうか。すなわち激情や過度の感性的判断を抑制すること，よりつっこんで言うなら，それらに不感症であることが知性の一面であるからで（特にカチアが自然科学を学んでいたこと，及び上で引いた次男ゴーロの発言を思い出そう），とすると男性から見ると，女性の知性とは男性とは逆に或る種のナイーヴさのあかしとも受け取られるのである。女性の知性とは，男性のナイーヴさと対になる性質なのだ。こう考えてみれば，カチアも，トーマスが惹かれた男性のタイプと必ずしも相反するとは言えないだろう。

トーマス・マンには『結婚について Über die Ehe』という有名な文章がある。[56]1925年，つまり結婚して二十年後に書かれたこのエッセイの中で，彼は同性愛について少なからず言葉を費やしている。単純に要約してしまえば，同性愛には美以外の祝福はなく，この余りに自由な愛の形式には呪いがつきまと

っている，結婚はそれに対して平凡さや慣れによっていつしか単なる性的結合を越えた建設的なものとなるのだ，というのである。

日記の公開によって彼の男色的傾向が明らかになった現在から見れば，こうした対比的記述にはそれなりに面白いところがある。無論，同性愛者としてのトーマスが真の姿でその結婚生活は仮面だなどと言う必要はないのであって，このエッセイで述べられていることは或る程度素直に受け取っていいだろう。単に同性愛が社会的に認知されないからではなく，カチア夫人との結婚生活を送る中では同性愛的傾向は必然的に裏の存在たらざるを得なかったと見るべきなので，この傾向が彼の創作活動に少なからぬ影響を及ぼしたのは事実としても，「平凡と慣れ」となった結婚生活を偽りと決めつける理由はどこにもない。実際彼は娘エーリカへの書簡で，この文章には《同性愛との原理的な対決が含まれている》と述べている。(57)対決の相手が時として御しがたくおのれを揺り動かすことがあるにせよ，その基盤にある夫・父としての生活の意味は揺らぐことはないと見ていい。「市民生活」という言葉は，トーマス・マンのこうした姿勢にこそ当てはまるのである。(58)

ここで改めてルネッサンス祭祀＝兄ハインリヒ＝芸術家・ボヘミアンへの批判がパウル・エーレンベルクへの友情を生んだことを思い出してみよう。素朴な同性と友情を結ぶことは，芸術家・ボヘミアンからの逃亡であった。だが人は永遠の逃亡者ではあり得ない。芸術家たちの住む気違い部落から逃げ出したなら，次には定住地を探さねばならないのだ。しかし人間は一定の法と秩序に支配された社会に居住する以上，おのれの性向に百パーセント忠実に生きることはできない。「美という，余りに自由な形式」，すなわち同性愛からも逃亡し，男女の一対でカップルを形成するという月並みな形式に従うことで，彼はようやく安住の地を見いだすのである。

繰り返すが，それをトーマス・マンがいやいやしたというのではない。彼は主体的に結婚生活＝市民生活という道を選び，以後半世紀にわたってそれを維持したのであって，この彼の生き方を虚偽の姿だなどと言うのは皮相的な見方である。ただ，そこに抑圧されたものも存在したのだということを一言つけ加えておけばよい。そしてそれは日記を待たずとも，『ヴェニスに死す』などで生前から明瞭になっていたはずだ。

『トーニオ・クレーガー』はその意味で後から振り返るなら，芸術家・ボヘ

ミアンからの逃亡と，結婚という月並みな市民的生活に入る狭間の，過渡的なトーマスの姿を小説として残した，貴重な記録と言うことができるだろう。

ところで，パウル・エーレンベルクへの苦しい愛情と『恋人たち』構想が密接な関係を持っていること，この小説構想がまとまった作品としては完成しなかった事情については上で述べた。

ではカチア・プリングスハイムを見初めた結果としてどんな文学作品が生まれたのか。言うまでもなく『大公殿下 Königliche Hoheit』である。この第二長篇がカチアとの恋愛・結婚体験を下敷きにしているのは余りにも有名な事実だから，ここでとりたててその点について論じる必要もないだろう。ただ若干注意しておきたいのは，この作品が最初に構想されたのはいつかという問題である。

トーマスがノート7にグラウトフ宛ての書簡下書き（1903年8月29日付け）を残し，これがもしかするとカチアを見初めた暗示かも知れないということについては上で述べた。ところが同じノートの2ページ後から，トーマスは『大公殿下』の構想を3ページにわたって書き記しているのだ。これは1903年9月に書き込まれたものと推測されている。[59] トーマスはノートに様々な印象や事柄を思いついたままに書き記しているので，単にのちに『大公殿下』の材料に結果的に使われることになったという点で見るなら，第二長篇用の書き込みはこれが最初という訳ではない。しかし，はっきり『大公殿下』とタイトルをつけてまとめて記述がなされているのはこの箇所が最初なのである。[60] なお兄以外の人間にこの作品の構想を最初に表明したのは，現存する書簡で見る限り1903年12月5日付けのW・オーピッツ宛てであり，また同じ日付の，すでに何度も触れた兄宛て書簡で，[61]

《私が『大公殿下』について話すと，あなたが何より強調したのは，題名がショウウインドーの中で目立つだろうということでした。》

と述べていることから，ハインリヒにはこれ以前から構想を打ち明けていたことが分かる。また同じ書簡で自分のアイデアである表現やモチーフを兄が無断で盗用していると非難した箇所でも，

《『大公殿下』の素材にしても，すでにお前同様に俺の内部に完全に蓄積されていたのだ，兄さんはそうおっしゃいました。もしもこの先兄さんが新作の中で，ついでのようにさらりと芸術家とは「大公殿下」のようだと

書いたとしたら，私は一体どうすればいいのでしょう。この問題をその後で詳しく展開するのはペダンティックということになってしまうでしょう。》

と述べて，兄が「大公殿下」という表現を自分より先に使わないよう釘をさしている。ちなみにこの手紙が上で述べたオーピッツ宛ての書簡と同一の日付を持つ点に注意したい。ハインリヒは身内であり同業者でもあるということで，作品がはっきりした形をとらないうちから構想を打ち明けたのだろうが，オーピッツに作品構想を伝えて

《芸術家は象徴的で代理的な存在だと思うのです，そう，君主のように。こうした想念の中には私がいつか書こうと考えている奇妙な作品――君主小説（ノヴェレ）の萌芽が含まれています。これは『トーニオ・クレーガー』と対になる作品で，『大公殿下』というタイトルになるはずです。》(62)

と述べたのは，作品構想が具体化しつつあった証拠だろう。カチアとの市電の中での出会いはこの二ヶ月後のことであった。

上述の通り，1903年8月のグラウトフ宛て書簡下書きがカチアを見初めたことを示すものなのかどうか，判断は慎重にすべきだというのが私の立場だが，いずれにせよこの時期，『恋人たち』構想の書き込みが減少し，逆に『大公殿下』構想がはっきりと形を整えてきたのは明らかだ。少なくともカチアと出会う心理的準備は，トーマスの側には熟していたのである。《結婚しようという意志があって，しかるのちに愛情が生まれる》というのは，彼が上述のエッセイ『結婚について』でヘーゲルを引用しつつ述べた有名な文句だが，(63)作品構想が先か，妻となる女性と出会うのが先か，細かい日時のつじつま合わせを無効にしてしまうものがここにはある。実生活での出来事と作品構想のこうした並行関係は，パウル・エーレンベルクとの友情体験と『恋人たち』構想の並行関係と比べてみる時，トーマス・マンという人間と作家のあり方をきわめて明瞭に示していると言っていい。

Ⅸ．トーマス・マンの結婚とハインリヒ・マン

ハインリヒ・マンにとってトーマス・マンの結婚とは何だったのだろうか。

ハインリヒが1903年12月5日付けの弟の書簡に激昂して兄弟の確執が表面化した事態については，すでに蜿蜒と述べてきた。そして残された返信用下書き

から，彼がこの時期おかれていた不安定な状態を看取できることにも触れた。

トーマスがカチアと正式に知り合った（そしてすぐ兄に報告した）のは1904年の2月であり，その8カ月後に二人は婚約，さらに4カ月後の1905年2月に結婚と，事態は急激に進展した。こうした弟の身の振り方は兄の生き方にも重大な影響を及ぼしたというのが私の仮説である。以下，この仮説を実証していきたい。

（1）転換期のハインリヒ・マン――作品から見て

すでに述べたとおり，『愛の狩猟』はハインリヒ・マンの転換期を告げる作品であった。その不出来ぶりが弟との軋轢をもたらしただけではなく，ミュンヘン市民社会の暴露的な側面を持つが故に，妹ルーラや銀行家であるその夫などからも批判的な目で見られることになったからである。

しかし彼は書くことをやめなかった。先の連載第4回でも触れたように《やめたら自分はおしまいだ》という意識に駆り立てられていたのかも知れない。

そして『愛の狩猟』で始まった彼の転換期は――トーマスがカチアと出会って結婚にこぎつけるまでの時期とちょうど重なるが――以後の作品にもはっきりとその痕跡をとどめている。したがって，まずこの時期に書かれた作品から彼の変貌を検証していこう。

a）短篇小説『フルヴィア Fulvia』

1904年2月27日付けのトーマスの兄宛て書簡から，ハインリヒが自作短篇を弟に送ったことが分かる。弟の処女長篇が順調に売れ行きを伸ばしている中，自分も負けずに仕事をしているところを見せておこうという対抗心もあっただろう。感想を述べたトーマスの返信が面白いので，まずこれを引用しよう。

> 《短篇，ありがとうございました！　わくわくするような気持ちで二回読ませていただきました。明日レーア家に持っていきます。そしてそれから，ポリングへ行く機会があれば，母に手渡すつもりです。卓越した小品ですね。緊密で，高貴で，名人芸的で，文体は兄さん独自のラテン的簡潔さを示しています。改めて思ったのは，今日では物語，冒険譚，正真正銘の

「短篇小説」を書き得るのは，いまだに「そんなことを思いつく」のは，唯一兄さんだけだということでした。兄さん自身が『愛の狩猟』について正しくもこう言われましたね。つまり，俺の作品を一度読んだことのある人間は，他の作品を最初の二ページ読んだだけでもう俺の書いたものだと分かるというのでしたが，これは『フルヴィア』にも完全に当てはまる言葉です。正真正銘，完璧なハインリヒ・マンがここにいます。最も素晴らしいと感じられたのは，兄さんが物語の（対話もですが）素朴な調子を言語の高貴さと調和させるすべを心得ているという点です。私は目下兄さんならではのこの作品に酔っていますが，最上の箇所は，ヴィチェンツァ砲撃を丹念に語っている箇所でしょう。ラミニャがいつも飼犬に顔をなめられるというのもとても気のきいたディテイルですね。そしてことに素晴らしいのがこの箇所です。「……とうとう私たちがお互いの目を識別できるまでになった。この夜，私たちの気づかぬうちにどれほどの嵐が目の中で荒れ狂っていたことか。今，二人の目は霊のように穏やかだった。」――「どれほど」の後の倒置法を兄さんはよく使いますが，私はこれが好きではありません。「どれほど滑稽なことか，お前は」といった言い回しが気どっていると同時に平板，つまり不快であると自分に感じられる理由がうまくは説明できないのですが。勿論ここでは「どれほどお前は滑稽なことか」でも駄目でしょう。私のまったく個人的な好みの問題ではあります。それよりずっと奇妙で不思議に興味深く，今なお少しばかり意外に思われるのは，兄さんの世界観がリベラリズムへと発展を遂げたことです。この作品にもそれが顔をのぞかせていますね。上に書いたように不思議で，そして興味深いのです！　兄さんは思いもかけず若さと力を感じておられるに違いありませんね。実際，このリベラリズムは恐らく単に「男の成熟」を意味しているのでしょうが，仮にそうでないとすれば，私はそれを一種の意識的に獲得した若さだと思ってしまうことでしょう。男の成熟！　私もそこまで行けますかどうですか。第一に私は「自由」ということがよく分からないのです。「自由」とは私にとっては純粋に倫理的で精神的な概念であり，「誠実」の同義語です。（おかげで何人かの批評家からは「心が冷たい」と言われました。）しかし政治的な自由には私はまるで興味がありません。偉大なロシア文学は恐るべき抑圧下に生まれたのではなかった

でしょうか。もしかするとこの抑圧なしには何も生まれなかったのではないでしょうか。このことは少なくとも，自由そのものより自由のための闘いの方が良きものである証拠なのでは。そもそも「自由」とは何でしょうか。自由のためにすでにあまたの血が流されたことからしても，この概念は私にとって薄気味悪い不自由さを，中世に直接つながるものを持っているのです……。でもここは私の口を出すべきところではないのでしょうね。》(1)

ここで言われているのが，短篇『フルヴィア Fuliva』である。成立時期ははっきりしないが，批判版全集の資料によれば，(2)恐らく長篇『愛の狩猟』成立直後ではないかという。つまり1903年の終わり頃である。ウィーンの日刊紙„Die Zeit“に1904年1月に二度に分けて掲載され，短篇小説集『笛と短刀 Flöten und Dolche』(1904年10月初版，ただし本には1905年と印刷された(3))に収録された。つまりハインリヒは新聞に掲載されたばかりの新作を弟に送付したという訳である。

さて，この『フルヴィア』はどんな作品だったのだろうか。簡単に筋書きを紹介しよう。(4)

*

舞台はイタリア。時はリソルジメント，つまり19世紀のイタリア国家統一運動の頃の話である。ある夜のこと，老いたる革命の女闘士フルヴィアは娘らを前に，いかに愛よりも自由が大事かを語り始める。

フルヴィアの夫クラウディオは勇敢な革命の闘士であったが，もともと虚弱な体質で76歳まで生きたのが奇跡だったほどであった。また美男でもなかった。フルヴィアの若い頃，枢機卿兼代官の甥のオレステ・ガッティという若者がいた。彼はフルヴィアに気があったが，彼女の方は，自分は自由を愛するからクラウディオと結婚するつもりだと宣言する。俺はその気になれば奴などすぐ片づけられる，お前らの言う自由は賤民のおしゃべりだとうそぶくオレステに，彼女は非難の言葉を投げかける。しかし彼は諦めずにフルヴィアに近づき，二人は密会したりもするが，結局彼女はクラウディオと結婚する。

やがて1848年の対独独立戦争になる。クラウディオとフルヴィアは独立をめざす自由の闘士だった。戦況は不利だったが二人の信念は変わらない。一方オ

レステは抑圧する側だった。フルヴィアは状況を打開しようとオレステの伯父に嘆願に行くが，現れたのはオレステだった。どのみちクラウディオは死に，お前は俺のものになるのだと言うオレステ。その場はそれで別れたが，ほどなく二人は再会する。オレステはフルヴィアにつかみかかる。彼女は逃げずに，昔二人で密会した時の思い出を語る。自由のための戦いで殺されたらどんなに素晴らしいことか，あなたはそれを知らないでしょうと言うフルヴィアに，オレステはこう答える。知っているさ，こういうお前の姿を見たからな，お前と一緒に殺されたらよかった，やはりこの国の自由のために戦おう。

自分だけで行こうとする彼に，一人にしないでとフルヴィアはすがる。彼は《兄のごとく》(5)彼女を連れてその地を逃れ，やがてフルヴィアは夫に再会する。夫の傷の手当をする彼女を残してオレステは一人で去り，やがて自由のために戦って死ぬ。

フルヴィアがこの話をし終えると，娘のラミーニャは言う。「ママは何て幸せなの。彼はママのために死んだのよ。」

しかしフルヴィアはこう答える。「お黙りなさい！　彼は自由のために死んだのですよ。」

*

この小説は傑作というに足りる出来ばえを示しており，ハインリヒ・マンの本領はやはり短篇にあるのではないかという感想を読む者に抱かせる。上で引用したトーマスの読後感も，直前に『愛の狩猟』を酷評して兄の不興をかったマイナスを挽回しようというバランス感覚がほの見えることを差し引いても，『フルヴィア』の長所をかなり正確に言い当てているのではないかと思う。

このトーマスの評言で注意を惹くのは，短篇の出来ばえと並んで，《それよりずっと奇妙で不思議に興味深く，今なお少しばかり意外に思われるのは，兄さんの世界観がリベラリズムへと発展を遂げたことです》と，兄の世界観に言及していることである。『フルヴィア』をトーマスは兄の世界観の表明として受け取った。ヒロインであり語り手であるフルヴィアの結語が「愛よりも自由を」なのだから，このトーマスの感想自体は当然のものと一応は言える。ただ，そういう感想だけでこの作品を，或いは作者ハインリヒの態度を片づけていい

のかは，疑問なしとしない。

はたして『フルヴィア』は自由は愛より大事だと訴えた作品と言い切れるのだろうか。私は，自由と愛の相克関係を巧みに表現し得たところにこそこの作品の成功の理由があるのだと思う。この短篇の最も美しい箇所は，自分の信念にもかかわらずオレステに惹かれる若いフルヴィアが真夜中に彼と密会するシーンであり，また独立戦争中に二人が再会して昔の密会を思い出す場面なのである。ヒロインの信念と相反する想いの美しさ，信念を共有しない者同士のねじれた愛，その愛のために信念を曲げる貴族階層の若者，こうした愛と自由の背反関係，そしてその中での緊迫感こそが，『フルヴィア』を傑作たらしめている要素なのではないか。だから話を聞いた娘は最後に「彼はママのために死んだのよ」と言い，フルヴィアはそれを否定して「自由のために死んだのです」と断言する。この二つの受け取り方は，愛は倒錯の中でこそ最も激しく燃え上がり，愛の純粋さは何らかの公的な名目下に否定される時にこそ逆説的に保たれるという事情を端的に表現している。ヒロインが自由の闘士としての信念を貫くにせよ，オレステが最後に自由のために死ぬにせよ，この短篇が単なる自由のプロパガンダで終わらず文学としての魅力を保ち得たとするなら，その理由はそこにしかない。

したがって，ここでトーマスが『フルヴィア』を読んで兄の世界観がリベラリズムに発展を遂げたと述べているのは，或る意味で不思議な評言なのである。そういう読み方もできようが，逆のとり方だって十分できるのだ。杓子定規なイデオロギー的外在批評家ならいざ知らず，またのちのハインリヒの思想的展開を心得た人間の後知恵ならともかく，この時点でトーマスが兄の世界観について上記のように断じているのはいささか奇妙なことと言える。

私はトーマスが作品を読み誤ったのだとは思わない。多分作品以外に，彼をそう判断させる何かがあったのだろう。なぜならトーマスは《この作品にもそれが顔をのぞかせていますね》（下線は引用者）と述べているからで，現存していないハインリヒ側の書簡，或いは人づてに聞いた兄の言動等，何かがトーマスをしてそのような判断に導いたのではなかろうか。

ちなみにそれまでのハインリヒの思想的展開については連載第１回のIIで述べたとおりであるが，二十代前半はユダヤ系資本に反発する雑誌の発行人を務めるなど，ブールジェ流の伝統主義・保守主義側からの資本主義批判に傾いて

おり，また31歳で出版した『女神たち』第一部ではヒロインが革命活動に奔走するものの，その政治的行為の無効性は比較的見やすい書き方がなされている。そうしたハインリヒの思想的遍歴からすれば，ここで彼が「自由」に肩入れし始めたことは意外と見られても不思議はない。

そこに注意すると，トーマスの手紙には微妙な含みがあることが分かるだろう。ハインリヒがこの世界観に至ったのが不思議だと繰り返して，《兄さんは思いもかけず若さと力を感じておられるに違いありませんね。実際，このリベラリズムは恐らく単に「男の成熟」を意味しているのでしょうが，仮にそうでないとすれば，私はそれを一種の意識的に獲得した若さだと思ってしまうことでしょう》と述べるトーマスの口調には，ごくかすかなイロニー，もしくは底意のようなものが感じられる。この頃ハインリヒは33歳になろうとしていた。「自由」や「革命」といった観念に溺れやすい年齢はとうに過ぎて，物事を多面的に見られる，文字どおり「男の成熟」を迎える年頃だった。トーマスは，兄さんなりに熟した思考をした結果がこうなったのでしょうとしながらも，この年齢になって無理に若返ろうとしているのじゃないでしょうねと幾分冷やかすような物言いをしているのである。

しかし『フルヴィア』を兄の世界観表明としたトーマスの感想は，以後のハインリヒの歩みから見るとかなり急所を突いたものだったのである。

註

X.

(14)　三浦　淳：『ブッデンブローク家の人々』とトーマス・マン（その2）。「東北ドイツ文学研究」第22号（1978年）所収

(15)　ハインリヒ・マン『ギュスターヴ・フローベールとジュルジュ・サンド』拙訳（「新潟大学教養部研究紀要」第24集1993年）66ページ，AA. Bd. XI. S.84

(16)　VIII, S.305

(17)　Mendelssohn, a.a.O. S.376

(18)　XI, S.107

(19)　Br. III, S.109f. また Mendelssohn は，晩年にカルルが自伝的スケッチを書いてこの頃に触れていることに言及し，該当箇所を引用している。Mendelssohn,

a.a.O. S.381f.

(20) Thomas Mann: Notizbücher 7−14. Frankfurt a.M.(Fischer) 1992 S.72

(21) Ⅷ, S.303

(22) THBW, S.19

(23) THBW, S.22

(24) 無論，彼の同性愛的傾向は日記が現存する中年期以降になって顕在化した訳ではなく，十代の少年期の頃からその傾向があった。1890年11月，兄ハインリヒはEwers宛て書簡（Br. an Ewers, S.195）で，哀れな弟は早いところ相応の年齢になってチャーミングな女と寝れば治るだろうと，弟のホモセクシャルな傾向を暗示している。また同年3月27日の Ewers 宛て書簡で，弟の最近の詩を読むと痛ましい気分になり，プラーテンの詩を想起すると書いているのもその暗示かも知れない（Br. an Ewers, S.106f.)。

(25) Mendelssohn, a.a.O. S.480

(26) Br.Ⅲ, S.432f.

(27) Thomas Mann: Notizbücher 7−14. S.54

(28) Br.Ⅲ, S.434

(29) Mendelssohn, a.a.O. S.489

(30) Hans Wysling: Zu Thomas Manns《Maja》-Projekt. In: Thomas Mann Studien I. Bern(Francke)1967

(31) 43ページ, In: Thomas Mann: Notizbücher 1−6, S.42f.

(32) Br.I, S.31f.

(33) 35ページ, In: Notizbücher 1−6, S.294

(34) Notizbücher 7−14, S.18

(35) Wysling, a.a.O. S.25

(36) Mendelssohn, a.a.O. S.378

(37) Ⅺ, S.107. マン自身の『略伝』中の記述。なおマンはこの箇所でパウルをカルルの弟と書いているが，これは彼の勘違いで，実際はパウルの方が兄である。

(38) Mendelssohn, a.a.O. S.487

(39) Ⅷ, S.300f.

(40) Notizbücher 7−14. S.89

(41) Mendelssohn, a.a.O. S.541

(42) Katia Mann: Meine ungeschriebenen Memoiren. Frankfurt a.M.(Fischer TB)1976 S.19 (山口知三訳『夫トーマス・マンの思い出』〔筑摩書房〕, 22ページ)

(43) Wysling, a.a.O. S.30

(44) K. Mann, a.a.O. S.17 (邦訳, 19ページ)

(45) Wysling, a.a.O. S.30では1年余り文通が途絶えたとされているが, これは恐らくWysling の論文が書かれた60年代は資料が十分ではなかったためで, 実際にはわずかながら手紙のやりとりはあった。TMBRR の1904年の項を参照せよ。しかしその頻度が落ち二人の仲が疎遠になったことは間違いない。

(46) TMBRR I. S.68

(47) K. Mann, a.a.O. S.21f. (邦訳, 24ページ以下)

(48) Mendelssohn, a.a.O. S.582ff.

(49) ビュルギンとマイヤーの『トーマス・マン年譜』は, 彼がプリングスハイム家のサロンに出入りし始めたのを1903年春としているが, これは恐らくマンの『略伝』の簡単な記述を読み違えたための誤りで, 1904年初めとするのが正しかろう。H. Bürgin/ H.-O. Mayer: Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens.1974 Frankfurt a.M.(Fischer TB) S.26.

(50) K. Mann, a.a.O. S.16 (邦訳, 17ページ)

(51) Golo Mann: Erinnerungen und Gedanken. S.37, 212

(52) Donald A. Prater: Thomas Mann. Deutscher und Weltbürger. Eine Biographie. München (Hanser) 1995 S.83

(53) XI, S.117

(54) 1901年5月7日付けハインリヒ宛て書簡, THBW, S.27

(55) Wysling, a.a.O. S.31

(56) X, S.191ff.

(57) Br.I, S.247

(58) 例えば最近出た Harpprecht によるトーマス・マン伝は, マンの後年の日記から同性愛的傾向を裏付ける部分を抜き出し, 同時代にアンドレ・ジッドがより大胆に同性愛的傾向を表明していたことと比較しつつ, ドイツの厳格な反同性愛的法がトーマス・マンの市民的生き方を規定したのではないかと示唆している。しかし私はここではトーマスの内在的な理由を重視すべきだと思う。

Klaus Harpprecht: Thomas Mann. Eine Biographie. 1995 (Rowohlt) S.

224ff.

ただ，ジッドが結婚する前に医者にかかって自分の同性愛的傾向について相談したことに触れて，トーマス・マンも同じことをした可能性はある，彼のノートには精神科医を含め何人かの医師の住所が書かれているとしている点は，なかなか面白い見方だと思う。Ibid. S.243, 255

(59) Notizbücher 7−14. S.90f.

(60) 「大公殿下」という表現自体はノート6の23ページと57ページにも出てくる。ただしノートの番号は後世の研究者が便宜的につけたものであり，ノートの判型や用途も一様ではなく，1冊を終えてから次に行くという使い方をトーマス・マンはしていない。ノート6は全体としてアドレスブックとして利用されている側面が大きい。「大公殿下」というノート6の書き込みはその前後の記述からみて恐らく1903年10月初め頃と推測されるから，ノート7の記述より後であろう。トーマスはノートを自宅用・持ち歩き用などに分けていたらしい。

Th. Mann, Notizbücher 1−6. S.289, 304

ノートの使い分けについては Thomas Mann Studien, I. S.65の Wysling の記述参照。

(61) THBW, S.33ff.

(62) Br.I, S.40 なお芸術家を王侯に喩える思考は，すでに『トーニオ・クレーガー』に見られる。Ⅷ, S.297

(63) Ⅹ, S.201

Ⅸ.

(1) THBW, S.47f.

(2) GW. Bd.17 Novellen II. S.421 なおFS版 „Flöten und Dolche“ では S.117に収録。

(3) GW. Bd.17 S.386, 388 FS版, S.112

(4) GW. Bd.17 S.81−92

(5) この表現には，前作『愛の狩猟』や直後の短篇『女優』同様，妹カルラへのハインリヒの想いがこめられていると見ていいだろう。

訂　正

前回の連載第４回（「新潟大学人文科学研究」第88輯掲載）について，次のように訂正します。

145ページ４行目　「短篇小説２編」→「短篇小説」

149ページ３行目　「約２ヶ月半後」→「約１ヶ月半後」